

No.8 ■理想のビオトープを考える ー磐田市桶ヶ谷沼地域を例にー

環境文化史学研究室 遠藤基

1.研究の背景と目的

Biotop は「生命」を表す接頭辞 bio とギリシア語で「場所」を意味する topos の合成語であり、「生物の生息に適した場所」を意味する。近年、生物多様性の重要性が認識され始め、ビオトープの保全、保護、復元が行われるようになってきている。しかし、保全や保護という言葉に表れているように、ビオトープは人間にとって「保護に値する場所」の意味合いを含んでおり、それが緊張感を与えているように感じられた。

ビオトープでは多様性の維持のために、ある遷移段階の管理、種の保存、復活が目標として掲げられる。そこは生物のための空間という色あいが強いように感じられる。そこで本研究では、さらに違う側面、人間との関係から考察を加えることにより、理想のビオトープ像を考えることを目的とする。

2.研究の方法

本研究では具体的な対象地として、たびたびビオトープの教科書的存在としてとりあげられる、静岡県磐田市にある桶ヶ谷沼を設定した。桶ヶ谷沼は市民の保護運動によって守られた沼であり、絶滅危惧種ベッコウトンボが生息するなど自然環境の面でも大変優れているため注目した。また、桶ヶ谷沼の北部には鶴ヶ池と呼ばれる同じような環境のもとに成立する池があり、本研究ではこれら二つの池沼を含む地域を桶ヶ谷沼地域として扱う。

対象地の調査手法として、まず、桶ヶ谷沼の保護運動を中心に行っている

「桶ヶ谷沼を考える会」の会員誌「桶ヶ谷沼を考える会会報」No.1 - No.41 を中心に、保護活動の変遷を調査した。また、基本データとして1989-1990年に大がかりに行われた生態調査の資料を用いて生態的見地からビオトープの存在とその変遷をおおまかに把握した。次に、桶ヶ谷沼地域に住む人々の暮らしや、ビオトープに対する意識を知るため文献を利用するほか、聞き込みやアンケートを行い、理想像を考える資料とした。

3.桶ヶ谷沼地域の概要

桶ヶ谷沼地域の位置する磐田市は静岡県西部にある、人口9万人の中規模都市である。現在ではサッカーの街として知られているが、もう一つの顔としてトンボの街があり、その中核をなすのが桶ヶ谷沼地域である。磐田原と呼ばれる天竜川の洪積台地の東縁に位置し、JR磐田駅から北東におよそ4kmに位置している。

桶ヶ谷沼の水源は沼自体の湧水と磐田原からの流水で、河川からの流入がないのが特徴である。沼の面積は7.43haであるが、その水面の大部分はアシやマコモに覆われている。日本で確認されるトンボのうち、およそ三分の一にあたる67種類が確認され、「トンボの楽園」として知られている。

桶ヶ谷沼の約500m北に位置する鶴ヶ池は、源頼朝が鶴を放し放生会を行った事からその名がついたといわれ、歴史のある池として地元で愛されている。自然環境も桶ヶ谷沼に劣らず優れており、その水生植物は「学術上価値の高い生物群集」として研究者たちの間では注目を集めていた。現在では植栽されたアンペライ（イグサの一種）が繁茂し、独特の景観をかもし出している。

4.桶ヶ谷沼地域のビオトープ

4-1. 桶ヶ谷沼地域の変遷

桶ヶ谷沼地域は古くから人が住み着いてきた所で、沼や池、それを取り囲む磐田原の林は積極的に利用されてきた。しかし磐田原やその周辺地域が次第に開発されることで、この地域の希少性が注目されていき、桶ヶ谷沼はナショナルトラスト運動にまで展開されてきた。このように、桶ヶ谷沼地域は様々な地域の性質や特徴を変えながら存在していると考えられる。そこで時期を三区区分し、特徴と変遷を追った。

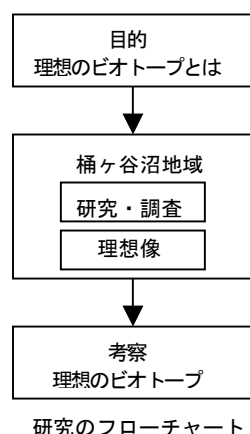
(1)第一期（桶ヶ谷沼が注目されるまで）

桶ヶ谷沼を含む付近一帯はかつて湿地であり、干拓により水田として利用された。桶ヶ谷沼の水田は非常に泥深く、イカダを利用して稲を運び出していた。一方、鶴ヶ池はジュンサイの採取が行われるほか、灌漑に用いられるなど、生活には欠かせない池であった。そんななかで、赤い牛や大蛇などの不思議な伝承が数々残っているのも鶴ヶ池の特徴である。

磐田原には400年程前はサル、オオカミなどの野獣が住み、人間は様々な罾や仕掛けをつくり被害を防いでいた。戦後までは入会地が存在し、燃料や肥料の採取に利用されていたため、住民によって管理されていた。しかし利用低下にともない、それらの場所は茶畑中心の商品作物の畑に変わり、さらに昭和30年代になると、磐田市に工場誘致が進んだために開発されていった。以上より第一期では積極的に自然を利用していたことがわかった。生物として注目されるものは、水田のウンカや畑を荒らすイノシシなど、有害とされるものであった。磐田原のような獣の生息場所は住むのに不適と扱われるか、生活のために必要だから利用するかのどちらかだったようである。

(2)第二期（桶ヶ谷沼を守る活動が展開される時期）

周辺地域が開発され、桶ヶ谷沼地域が注目されることとなった。桶ヶ谷沼は「トンボの楽園」として、観察会なども多く開かれ、ビジターの数が増し、生態系へのインパクトも無視できないものとなっていた。そんな折1991年に静岡県の自然環境保全地域に指定、1992年には観察路や観察小屋が整備されることで、自然と人間の間に距離をとる仕組みができてくる。これは第一期と比べて、利用の形態だけでなく、空間的にも性質が変化している現れであった。第二期では、生活と結びついた利用は影をひそめ、沼を守る運動やま



ちづくりなど大きな流れのなかで派生したものが中心となる。しかし、この時期の様々な活動が桶ヶ谷沼の土地とその自然を守ることになったのは事実であり、桶ヶ谷沼地域を考える上で見逃せない時期であった。

桶ヶ谷沼の保護運動の経緯

1960s	地元自然研究団体によって生物相に注目
1980s	NHK などにより数回にわたりテレビ放送
1985	環境庁アメニティタウン計画のモデル地区に
1986	「桶ヶ谷沼を考える会」発足
1988	ナショナルトラスト運動はじまる
1989	県予算 19 億 6800 万が事業費として計上
1991	桶ヶ谷沼が「県の自然環境保全地域」に
1993	「桶ヶ谷沼管理運営委員会」発足
1998	「ベッコウトンボを捕獲・産卵させる」許可申請
1999	アメリカザリガニ 約二万匹捕獲
2003	ビジターセンター建設予定

(3)第三期（現在）

現在の桶ヶ谷沼は定期的にトンボ観察会などが開催されるが、一時期のブーム時のような騒がしさはなく、落ち着いた沼を取り戻しつつある。「貴重な沼」「トンボの楽園」もある程度理解され、地元住民の積極的な管理など、沼を生活の一部としている人も存在している。沼は水不足による陸地化が進み、アメリカザリガニの生息範囲が拡大するなど、「トンボの沼」とっては危険な状態となっている。2001 年は水位確保や生態系保護のため、沼のほとりに井戸を掘った。今後、2003 年にはビジターセンターも建設される予定である。一方、鶴ヶ池では公園化計画が進行中である。

4-2. アンケートより

以上のように桶ヶ谷沼地域はさまざまな形で人間とかわかってきた。第一期では「ただの沼」であった桶ヶ谷沼が第二期では「トンボの沼」と価値がつけられた。地元の利用意識から鶴ヶ池の公園化構想が発生しているように、地元ならではの思いが感じられ、それを探るためアンケートを実施した。アンケートでは「思い出」や「愛着」をキーワードに、それに関する話を自由に書いてもらう形式をとった。100 通用意し、その内 37 通を回収した。

桶ヶ谷沼では「田んぼ」に関する回答が 17 と多かった。泥深い中での作業が思い出深いようである。田んぼに用水を取り入れる際、ウナギやフナなどで遊んだ「魚捕り」も 11 と多い。アシやマコモの抽水植物によって形成される「浮島」(4) に咲くカキツバタも心に残っているようだ。そんななか、「トンボ」のように第二期に意識されるようになったものもあった。現状については自然環境保全地域に指定されたことも関係し、「休日に散歩」「自然愛護団体が熱心」など第一期と比べると積極的な利用は見られないが、「自然が豊かな場所」という認識は共通のようである。

一方、鶴ヶ池では、「ジュンサイ」に関するものが 22 と非常に多い。「水質」が良かったこと(4)で、豊かな水生植物を多く利用していたようである。「ヒシ」の実とり(3)や「イグサ」を刈り取り、ゴザムシロに編んだ経験(8)などがある。「舟遊び」も 11 と多く舟を利用し、これら植物を採取していたようである。現在でも「地域のシンボル」的存在で、「昔の面影はない」「計画があるようだがそのままにして欲しい」など桶ヶ谷沼とは異なり「共有地」的特徴がうかがえた。

4-3. 各時期の特徴とビオトープ概念

第一期は様々な体験を通し、日常的な場所として沼や池が存在していた。人の生活と自然とは切り離せない関係にあり、第二期を迎えこれが遊離したのがビオトープと考えられる。「存在」が価値になり、それを守ることが重要視されるようになると、そこでは人間の生活とは切り離された特殊な空間が形成された。ナショナルトラスト運動が「一人一人の価値ある沼となるように」と運動指針を示していたように、そのような中で個人の価値を見出すのはなかなか難しい。時代の流れでは、荒地か宅地になる運命であった桶ヶ谷沼は聖域化されることで保護されることとなった。

	利用の形態	備考	概念
第一期 地元人中心	魚捕り・舟遊び ジュンサイの採取 水田の利用 入会地の利用	生物はただ生息 資源として利用	×
第二期 トラスト参加者 ビジター増加	まちづくり 観察会 自然環境保全地域 環境学習	注目を集める 存在が価値 特殊な空間構成	◎
第三期(現在) 考える会など ビジター減少	観察会 考える会の管理	第二期の延長 新しく関係を構築	◎
理想(第四期) 地元人 考える会など ビジター	トンボの楽園 新しい管理形態 新しい利用形態	特殊な空間の脱却 新しい地元の誇り 管理が生活の一部 ビジターセンター活用	○

4-4. 第四期（桶ヶ谷沼地域の理想像）

桶ヶ谷沼は守られたが、今後その存在、価値を持続させるには多くの労力を要する。桶ヶ谷沼地域では「新しい地元の誇り」として生活に取り入れられながら管理されていくのが望ましい。貴重な自然に注目し訪れる人も多いため、ビジターセンターも活用し、その人なりの価値を見出せる空間を作っていく必要がある。

5. 考察

現代では、桶ヶ谷沼のようなビオトープが付近に存在することが、ある種のステータスになっている。しかし、生活の急激な変化は、その存在自体を危ういものとし、第二期のように空間を聖域化することで安泰となっている。ビオトープの概念はこの時期に際立ち、保護に値する場所という意味合いが強くなる。この時期、人間にとっては付き合い方が画一的になりがちで、「貴重な自然」という一般的な価値が色濃い。しかし、それを誇りとして、その人なりの価値ある自然とすることもできるようである。今後、第二期を経過して、理想のビオトープを目指すには、さらに個人の価値を見出せる空間にしていける必要があるだろう。また、そうすることでビオトープは安定した存在になっていく。第一期は生物も、それにとまなう人間の愛着も育まれた創出の時期であった。存在自体に価値が見出されている現代では、ビオトープ事業とともに環境学習が開かれることもあるが、それらも自然とともに関係を育む点で一種の創出の形と考えられる。そのような場では「貴重な自然」よりも、「どこにでもある自然」を意識させていくことで、より身近な、理想のビオトープが生まれると考えられる。